



2025年（令和7年）

4月号（No. 959）

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

昨年活動した4隊が登壇 海外登山報告会2025を開催

田島圭悟

昨年、本会からの海外登山助成を受けたり、創立120周年記念事業の一環として実施された4つの登山隊による報告会が、芝浦工業大学豊洲キャンパスで開かれた。今年も天皇陛下ご臨席の下、クライミングや沢登り、2つのヒマラヤ初登頂などの成果が発表された。YCカナダ合宿のメンバー、田島会員によるレポート。

3月15日、東京・豊洲の芝浦工業大学で、同大学山岳部と日本山岳会の共催による海外登山報告会2025が開催された。当日はと

きおり雨もばらつくような天気だったが、幅広い年齢層の参加者があった。

会では昨年、日本山岳会の助成や創立120周年記念事業の一環として実施した山行、初登頂や初週行を含む4団体から報告があつ

第2回YCカナダ合宿

た。昨年と同様、天皇陛下のご臨席の下で開催された。

1925年、横有恒、橋本静一、早川種三、三田幸夫、波多野正信、岡部長量によつて初登頂されたアルバータ(3619m)。これは日本初の海外登山であり、さらに登頂したメンバーは日本山岳会員で構成されていた、縁の深い山であ

目次

昨年活動した4隊が登壇	
海外登山報告会2025を開催	1
「特別事業補助金」を活用して	
支部で「初級登山教室」を運営	4
「山でダニ!!」講演会を開催	6
追悼	7
カラー写真集全盛の現代に	
モノクロで雪の八甲田山を再現	8
山の名著再読	10
活動報告 山行委員会	12
新入会員	12
支部だより	13
図書紹介	14
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月～金 10～20時
第1、第3、第5土曜日 10～18時
第2、第4土曜日 閉室

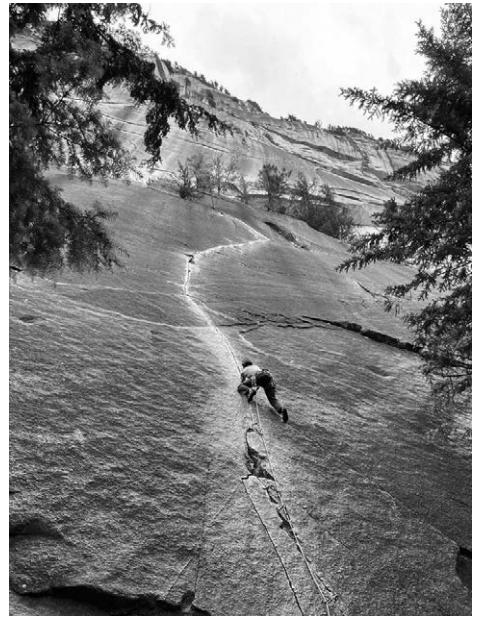


壇上で映像とともに報告する学生部ブング登山隊のメンバー

る。そのアルバータに、初登頂100周年を記念して2025年の登頂を目指す3ヶ年計画がある。その計画の2回目となるYOUTH CLUBカナダ合宿についての報告があつた。

2回目となる昨年は20～50代の幅広い年齢層から10名が参加した。隊はカナダのメジャーなクライミング・エリアであるスコミッシュとバガブーを目指したものの、異常な積雪でバガブーは断念。キヤンモア周辺でのクライミングに変更となった。

海外のクライミングというものはハードルが高いように感じられるが、短い期間で比較的気軽に楽しむことのできるカナダの岩の魅力について



スコーミッシュの岩場の美しいフィンガー・クラックを登る

習院大学山岳部のOBも参加すると紹介された。脈々と受け継がれてきた伝統の重みを感じさせる発表であった。

辺境クライミング隊

ミンドロ島・カツイル谷初廻行

続いて発表があったのは、フィリピン・ミンドロ島にあるカツイルラン川の支流。カツイルランを肯定して命名したカツイル谷の初廻行について。

発表の冒頭では、日本山岳会と沢登りのつながりについて紹介。1989年に創設された日本山岳会の海外登山助成金で、沢登りに助成したのはこの山行が初めて。沢登り自体は日本特有の登山ジャ

ンルであり、冠松次郎の黒部渓谷でも知られているように、本会との結び付きも強いものがあるとした。そして、海外の沢はまだ未踏なものが多く、未知の

要素を有していることも話され、新たな海外登山の可能性を示してくれるものであった。

実際に地図を探すことから始まる山の体験は、情報の発達した現代では国内、さらには世界でも得難いものとなっているが、こうした東南アジアの沢は、旧ソ連が作成した、定かではない地図を活用するという貴重な体験ができるようだ。また、発表者の小坂健一郎さん、通称「けんじり」は皮膚科医で、フィリピンから帰国後に動物の尿で汚染された水や土壌から感染するレプトスピラを発症した体験も解説した。

ヒマラヤキャンプ2024隊

サンクチュアリ・ピーク初登頂

発表の後半は、創立120周年記念事業の一つとなっているヒマラヤキャンプ隊から始まった。ヒマラヤキャンプは、ヒマラヤや海外登山の未経験者、あるいは経験が浅い20〜30代を対象に公募して編成されたもの。ミレーティングやトレレーニング山行を重ねてチームをつくり、ヒマラヤ6000m級の未踏峰を目指すという取り組みである。

2024年隊は、ヒマ

ラヤの中でも特に隔絶されたエリアである西ネパールのドルポ山域にあるサンクチュアリ・ピーク(6209m)を目指した。隊はネパール各地に被害を与えた大雨による交通不全の影響を受けながらも9日の日数をかけてキャラバンを実施。キャラバン中には当初予定していた経路と現地のポーターによるルート情報とで判断に苦慮しつつも、初登頂に至るまでの道のりについて話した。

キャラバン中の難所では、深い



カツイル谷最大の大滝。ライトニング・フォールと名付けた

谷に木を立て架けただけの危険な橋を渡る場面も。この橋がなければ谷筋を進むのではなく、標高の高い峠を越えてベースキャンプに向かわなければならなくなる要所であった。隔絶したエリアであるこのような場所に誰がこの橋を架けたのかと不思議に思い、ポーターに聞いたところ「日本人の大西が架けた」という話であったそう。ヒマラヤで大西さんと言えば大西保さんであるが、記録は残っておらず本人も亡くなってしまっ



登山を終えた隊員たち。背後の右手がサンクチュアリ・ピーク



スノーリッジと雪壁を突破、プンギの山頂が目の前に迫ってきた

ているため詳細は定かではない。ともあれ、日本人の先人の足跡がヒマラヤの奥地にまで残っていることを気付かせる出来事だった、とのこと。

西ネパールはあまり外国人が入っておらず、いまだに情報が少ない。そのため登山だけでなく、キヤラバン中に出会った文化や景色の全てがすばらしい経験であった、と話した。

学生部隊、プンギ初登頂

最後に発表があったのは、日本山岳会の学生部登山隊によるプンギ（6524m）の初登頂。このプンギは、2022年のヒマラヤキヤンプ隊がトライするも6150m地点で撤退した山。ヒマラヤキヤンプ隊の情報を得て、自分たちならどのようにして登頂するか、等身大で考えて挑戦した様子が発

表された。学生だからこそ登山期間を長く確保できることを活かして高所順応には十分な期間を設けたり、アタックできるチャンスをもく設定したりと、堅実な計画内容から解説した。

隊は青山学院大学、東京大学、立教大学、中央大学の4大学山岳部員たちの混成で構成されている。普段は自大学での活動をしつつ、隊としてもトレーニング山行を繰り返したようだ。

そして、発表中に映写機材のトラブルがあったが、

「今回の報告もすぐく考えて準備しているんですけど、全部うまくいかないんです。全部うまくいかないんですが、でも僕たち5人がそろくと、なんかやんや切り抜けられるんです。」と登山中の思い出と重ね合

せて振り返っていた。

*

今回の報告会はアルバータや沢登り、ヒマラヤ、大学山岳部といったキーワードから、ジャンルやスタイルは違えど日本山岳会と縁の深いものが形となった山行の報告であった。これらは、高難度のクライミングが高所でも行なわれる現代においては、最先端の登山ではないかもしれない。しかし、未知の世界を自ら調べて計画し、実行するというのは、初めてカナダのアルバータを目指した100年前と変わらず魅力的で、大事なことである。

ついつい近くて手軽に行けるものにはかり目を向けてしまいがちであるが、挑戦するのが大事であるということに気付かされた報告会であった。

報告会の後には懇親会も開催された。報告会で気になったことなどを、各隊のメンバーから直接聞くことができた。実際に行くのにかかった時間や費用、クライミングした岩の質感まで質問が上がり、短いながらも充実した交流の時間であった。

(YOUTH CLUB委員会)

REPORT

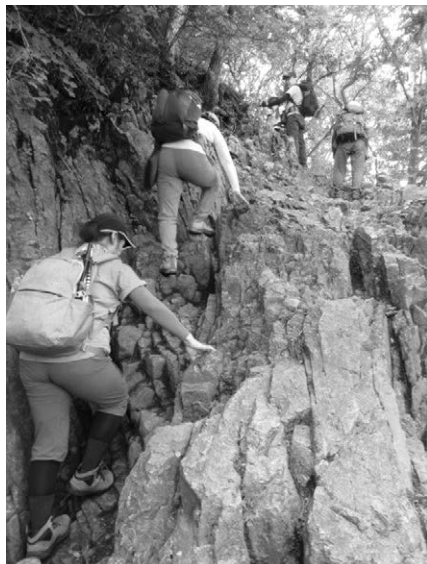
「特別事業補助金」を活用して 支部で「初級登山教室」を運営

東京多摩支部 河野悠二

本部から助成される「特別事業補助金」により2022～24年度に実施した事業「初級登山教室」に関する事業内容とその結果について報告する。

事業を計画した背景

「自ら登山計画を練り、仲間とパーティを組んで山を安全に楽しむ」自立した登山者を育成し、多摩地域に健全な登山愛好者を増やす目的で、登山教室を2012年から行なっている。初心者向け半年



岩場歩きの基本は三点支持で(奥多摩・大岳山にて)

2年間の登山教室は毎年受講生を募集し、毎年修了生を卒業させていた。したがって、2つの期の登山教室を並行して運営していたので、講師・スタッフの負担は相当のものがあつた。
順調に登山教室を運営していたが、2020年度の8期は新型コロナウイルス感染症拡大により1年間中断

に継続して初級者向け1年半の計2年間を登山教室として運営してきており、教室は机上講座と実習登山を組み合わせたものである。

講師・スタッフには、登山経験豊富な支部員がこれに当たり、指導の統一性を確保するため主要メンバーで「登山教室ハンドブック」を作成し、スタッフ育成の教本とした。

した。その後、登山教室を1年間に変更して、講師・スタッフの負担の軽減を図った。また、山行リーダーなどの確保のために2年間の中級登山教室を立ち上げ実施した。

事業の目的

登山教室スタッフの確保およびリーダー層の育成とともに、支部運営要員の確保を目指すものである。そのために登山教室修了生の入会促進を積極的に行い、スタッフ研修を実施する。

事業の内容

＊登山教室を継続させるために受講生を確保し、会員増を図る。
＊講師・スタッフなどのリーダー層を充実させるためのスタッフ研修の実施。
＊修了生の交流が期ごとに固まらないよう、懇親山行の実施。

事業の実施状況

年度ごとの事業内容とその結果は次のとおりである。

(1) 2022年度(第9期)受講生22名、講師・スタッフ31名



ときには沢沿いのルートを行くことも(奥多摩・川苔山にて)

＊講座6回、181名(一部の講座は外部講師を依頼)
＊実習登山12回、283名
＊スタッフ研修1回、10名
(2) 2023年度(第10期)受講生26名、講師・スタッフ34名
＊講座7回、235名(一部の講座は外部講師を依頼)
＊実習登山12回、351名
＊スタッフ研修1回、16名
(3) 2024年度(第11期)受講生20名、講師・スタッフ33名
＊講座7回、235名(一部の講座は外部講師を依頼)



雪道の歩行はストック・ワークが大切(御坂山塊・三ツ峠山にて)

10期生・講師・スタッフの方から親切丁寧にご指導いただき、また多くの仲間を増やせて、今後の山登りが楽しみである。



雪上歩行ではスノーシューにも習熟したい(南アルプス北端・入笠山にて)

登山教室修了生の感想

9期生…コロナ禍明けで体力的に厳しいかと思つたが、歩行速度がゆつくりで、なんとか山行についていけた。

10期生…講師・スタッフの方から親切丁寧にご指導いただき、また多くの仲間を増やせて、今後の山登りが楽しみである。

- *実習登山12回、367名
- *スタッフ研修1回、13名
- *スタッフ自主山行3回、22名
- リーダー候補者が登山計画を立案し、実行して経験を積ませた。
- *宿泊懇親山行1回、16名
- *受講生用に「登山教室テキスト」(66ページ)を作成し、受講生に配布した。

11期生…山登りの楽しみ方が多様であることを教えていただいた。特にスノーシューは、誰も歩いていない雪面を歩く楽しさを教えていただいた。

新規スタッフたちの感想

従来は連れて行つてもらうという認識から、今度は連れて行く立場になって、山行の大変さをヒシヒシと感じている。そのなかでも楽しい山行を目指し、仲間を増やしたい。

事業の成果

スタッフ確保のために登山教室修了生を積極的に勧誘して入会してもらい、この3期の入会者は30名を超える状況である。登山教室修了生から累計で130名を超える入会者があり、登山教室のスタッフとしてだけでなく、支部運営に欠かせない各委員会や

PTのメンバーとしても参画してもらい、支部にとつて登山教室は大いに貢献してくれている。

今後の課題

登山教室としては、2年間の教室に戻してより充実を図りたい。そのためにはスタッフの確保とリーダー候補の底上げが必要になる。特にベテランの講師・スタッフの高齢化に伴い、経験の浅いスタッフの育成が急務であり、スタッフ研修やスタッフ自主山行の充実を推進していきたい。

『山岳』第120年の原稿募集

本会の機関誌『山岳』第百二十年(2025年)の発刊は本年9月の予定ですが、「記録」「調査・研究」「紀行・読物」などの幅広い分野で、ぜひ会員の皆様方からのご投稿をお待ちしております。締め切りは5月下旬。

なお、採否につきましては、恐縮ですが編集委員会に一任させていただきます。手書き原稿でも結構ですが、できれば下記宛メールでご投稿をお願い申し上げます。

〒123-0852東京都足立区関原三丁目25-3 久保田賢次

☎090-3402-6988 ✉gama331202@gmail.com

(『山岳』編集委員会)

山岳研究所の「利用要領」を一部改正しました

上高地山岳研究所の「利用要領」を4月1日付で改正しました。主な改正点は、団体の予約金払い込みの廃止や「施設維持協力金」を利用料金に含めることなどですが、詳しくは日本山岳会のホームページ「上高地山岳研究所」の項をご覧ください。また、紙面での詳しい改正内容の発表は、本会報5月号で掲載する予定です。(山岳研究所運営委員会)

REPORT

「山でダニ!?」講演会を開催

医療委員会担当理事 原田智紀

辺境クライマー、小阪健一郎委員（皮膚科医）による、山のダニについての講演会を3月14日（金）に東京体育館の第一会議室で開催しました。会報「山」での開催告知から募集締切が短い中、日本山岳会の会員・準会員19名、一般22名に参加していただきました。

山のダニが関連する疾患を軸にして、ダニの種類や生息域、媒介する微生物の発見者まで、幅広い知識を、専門的になり過ぎないように気を付けながら解説していただきました。ヒトには吸血しないダニの説明で、演者のダニ好き的一面が伝わり、原因微生物発見時の感動的ストーリーの紹介で、演者の人柄が伝わってきました。



演者の小阪健一郎医師

話題の切り替え時には参加者へのクイズがあり、座長の橋本しをり会長にとっても参加者にとっても気を抜けない瞬間が訪れましたが、話の面白さにあつという間に1時間30分が過ぎました。講演途中の質問でも最後の質疑応答でも参加者の興味の深さが感じられました。

これから、私が講演中にメモしてきた内容を3つ紹介します。

(1)「シウルツエマダニの生息域とタカサゴキアラマダニの生息域は重ならない」

シウルツエマダニは、ライム病という病気の原因微生物を媒介するマダニで、北海道など寒い所に生息しています。本州にもいますが、標高1500m以上の寒い所にいて、西日本にはいません。一方、タカサゴキアラマダニは、T A R I (tick-associated rash illness) という皮膚科疾患を引き起こすことがあるマダニで、西日本に生息していますが東日本にはいません。両方の生息域を地図上

に表わすと、きれいに日本が2色に分かれます。

(2)「獣肉アレルギーは、マダニに刺されれば刺されるほどなる」

獣肉アレルギーとは、牛肉や豚肉に含まれる糖鎖（各種の糖が鎖のように連なった物質）に対してアレルギー反応を起こす病気です。この病気はマダニに刺されれば刺されるほど発症する確率が高くなります。マダニの唾液に同じ糖鎖が含まれるため、刺されることでこの糖鎖に対するアレルギー反応が起こるようになります。注入される唾液の量がある程度多くなるまでは、獣肉アレルギーを発症しないようです。通常、食事によるアレルギーは食べてすぐに起こるのですが、獣肉アレルギーの場合には食べてから数時間後に発症するため、なかなか食べ物に原因があることに気付かれないそうです。ちなみにダニは「咬む」のではなく、「刺す」生き物です。私を含めて「咬む」と言っていた登山者は多いと思いますが、修正を。

(3)「ダニ媒介脳炎のワクチンを打った」

ダニ媒介脳炎は、マダニが媒介するウイルスによる脳炎で、北海道で発症者が報告されています。死ぬこともある疾患で、車椅子生活になった生存者の方が呼び掛け続けたワクチンがやっと製造され、日本でも打てるようになりました。ダニ媒介脳炎は、マダニに刺された場合にも予防できる、唯一の疾患となりました。SFTSと呼ばれる重症熱性血小板減少症候群については、いまだにワクチンはないので、マダニに刺されないようにすることは重要なままです。虫除け成分であるDEETの濃度は、濃い方が長時間の予防効果を期待できるようです。

令和7年度も登山と医療の講演会（テーマ未定）を開催予定です。



一般の参加者の姿もあった講演会場の様子



酒井 敏明(さかい・としあき)

会員番号4656 永年会員
 1932年 大阪市生まれ
 1952年 京都大学入学と同時に山岳部に入部
 1960年 ノシヤックに初登頂
 1962年 インドラサン登山隊の副隊長を務める
 1966年 京都大学大学院文学研究科博士課程退学。東海大学文学部講師、同助教授を経て帝塚山大学教授。同名誉教授
 1988年 梅里雪山登山隊学術隊長を務める
 2024年12月3日 逝去、享年92

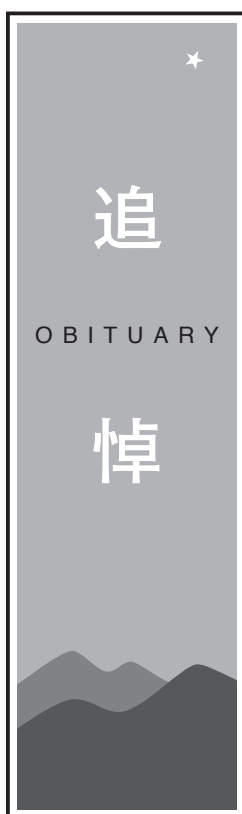
酒井敏明さんは2024年12月3日に92歳で亡くなりましたが、本会報「山」同年8月号に岩坪五郎さんの追悼記を書かれたばかりでした。「私は昭和7年大阪市生まれ。同27年、京大文学部に入学、同時に京大山岳部に入部した。岩坪さんは山岳部の2歳年下組の後輩に当たり、互いに相手を敬愛し合う友誼を結び、爾来六十余年の歳月が流れた」と。

酒井さんは京大山岳部でリーダーを務め、毛勝三山から剣岳への北方稜線をポーター方式で3月に、

士山岳会(AACK)パミール高原学術調査隊(酒戸弥二郎隊長)で、ヒンドウ・クシュ山脈のノシヤック(7492m)に初登頂しました。アフガニスタンのワハーン渓谷に入り、当時は謎の山と言われたノシヤックを探り当て、大学院生だけで登り切った壮挙でした。頂上に置いたこけし人形を第2登のポーランド隊が確認し、両隊の友好が続いたエピソードもあります。

追悼 酒井敏明さん

斎藤清明



30日がかりで初トレースするなど、剣岳や南アルプス、日高山脈などで意欲的な山行を重ねました。文学部文学科(英語英米文学)を出たのち、史学科(人文地理学)に学士入学して京大文学部を二度も卒業、大学院を修了するまで14年もの間、学生・院生でした。その間にノシヤック登頂に続いて1962年、京大山岳部が派遣したパンジャブ・ヒマラヤ遠征隊の副隊長を務め、インドラサン(6221m)初登頂に成功しています。

そのころ京大では、日本の大学で初めての探検部が誕生するなど、登山・探検を巡って様々な活動の時代でしたが、酒井さんはヒマラヤ初登頂を目指し、ぶれなかったのです。

東海大学文学部講師に就職されたのち、同大助教授を経て、帝塚山大教授を務め、同大名誉教授でした。人文地理関係の論文、著書もたくさんあり、『旅人たちのパミール』玄奘、マルコ・ポーロはどの道を通ったか(春風社、2000年)や『世界の屋根に登った人びと』(ナカニシヤ出版、2005年)は、自らの体験に裏付けられた、世界の登山・探検史の好著で

す。

壮年になってもキリマンジャロやチンボラソ、マウント・レーニアなど、広く世界の山々に仲間を誘って登山・トレッキングを楽しめました。なかでもエクアドルのチンボラソ(6310m)は、赤道付近が膨らんでいて完全な球形ではない、地球の中心から見ると「地上最高点」。19世紀半ばまで世界最高峰とみなされていたことなどを『世界の屋根に登った人びと』で描かれ、地理学者としての面目躍如です。

京大山岳部で12年後輩の私は、厳しいリーダーだったと噂に聞いていました。でも、AACK50年史の今西錦司編『ヒマラヤへの道』(中央公論社、1988年)の執筆でお世話になり、詳細な年表も作成していただきました。AACKの記録づくりなどアーカイブ事業にも尽力されました。

今西錦司さんの晩年の山行によく同行され、ご家族で見えられたこともあります。冬の京都北山で、お嬢さんとウチの娘が今西さんになついているのを見て、歯科医の奥さまともども微笑まっていたのが懐かしい思い出です。

写真家、新著を語る

カラー写真集全盛の現代に
モノクロで雪の八甲田山を再現

いちのへ義孝

地元の新聞社出版部にいる知人に、以前から「本を出版したい」と顔を合わせるたびに言っていた。しかし、知人からは「いま出版は絶望的ですよ」と返ってきた。それでは出版は墓場での話か、と諦めていた。

ある日、私の部屋の本棚に山岳雑誌『山と溪谷』やカメラ雑誌『日本カメラ』など、かつて寄稿し、掲載された雑誌や本を詰め込んでいたところ、それらの重みで本棚が歪んでしまった。それを直そうと本を取り出していたところ、本の間から紙焼きした白黒のプリントがたくさん出てきた。プリントを自分で入れた記憶がないが、長い年月が過ぎていたのだ。

確かに冬山登山のとき、小型カメラにフィルムを入れて、パチリパチリやっていた。貴重品だったフィルム。1シリーズに36枚撮りフィルムを1、2本使うかどうかだった。30歳で退職し、写真の道へ足を踏み入れてしまった。その

間に世の中は様々な場面でカラーへと転換し、しかも年々派手になっていった。フィルムもしかり。

そうは言うものの、それでもときどき白黒フィルムでパチリやっていた。そのころ八甲田山で知り合った写真家・笹森秀雄さんから山岳写真の薫陶を受けた。そうして1994年、私は八甲田山初のカラー写真集を出版することができた。登山家・田部井淳子さんから序文をいただいた『八甲田山』（柘の葉書房）である。さらに2007年、ドイツ文学者・池内紀さんの序文で『八甲田山 四季と花』（東興日報社）も出すことができた。そのほか『八甲田 花旅』や『薫風る森 蔦』などを出版できた。まだカラーで出版できる分の写真がある。

しかし、本棚から出てきた白黒のプリントを見ているうちに、なんとなくこれで写真集ができないかと考えた。ただ想いが募るばかりで、いたずらに年月が過ぎてしま

った。

そこで印刷会社に相談したところ、多少高額になるが、少数数でも刷ってくれるのとのことだった。

そのような次第で、少数数の自費出版という形で走り出したのである。自分なりにレイアウトを考えながら写真を選び、ゲラ刷りを出してもらった。そして、古くからの知人である横山厚夫さん、大森久雄さん、神長幹雄さんの三氏に序文ならぬ前文を書いてもらうことを勝手に決めていた。

横山さんとは1972年、南アルプス・北岳から農鳥岳への稜線を縦走中に知り合って以来のお付き合い合い。大森さんは、横山さんと一緒に南八甲田へ来られたのを機に知り合い、その後、旅のガイドブックを執筆させてもらい、さらに山旅シリーズ『花の山旅 みちのくの山』（実業之日本社）を出版していただいた。また、神長さん



「広がる雪原」 朝陽が仙人俗湿原に樹氷の影を映し出す

は『山と溪谷』の元編集長で、私が八甲田山の登山記録などを投稿し、その後も長年にわたって登山ガイド記事などを寄稿させてくれた。三氏とも日本山岳会の会員で、山岳写真の知見も十分ある。特に大森さんは、山岳図書の編集ではその名を知られた人物である。その三氏に写真集の前文をと思い、ゲラ刷りを送って書いてもらうこ



「吹雪に耐える樹氷」 山の天気は七変化？ 変化があるからおもしろい

とにしたが、皆さん多忙な方々である。原稿がなかなか届かない。どうしようもない写真集ということもあつたのであろう。

前文が届かない間に写真集のレイアウトを変え、何度も試し刷りを繰り返し続けた。3、4ヶ月も過ぎたころやっと前文が届き、印刷の準備ができた。

そうしたら、私の開けずの金庫

から2002年、国際山岳年を記念して開かれた写真展の原板が出た。当時はあまり話題にならなかったと思うが、国連大学主催で東京など大都市で開かれたと記憶している。写真展には天皇陛下（当時は皇太子殿下）と28名の写真家の作品が展示された。錚々たるメンバーに加わって、日本山岳写真協会・風見武秀会長の推薦で私の作品も出展すること

ができた。その作品を

今回の写真集の1ページ目にカラーで入れ、最終ページには近く招待されるであろう、あの世への入り口をイメージさせるカラー作品（ちなみに作品タイトルは「月の地獄沼」）を加え、写真解説などを含め総80ページの写真集となった。

やっと本刷りを始めたが刷りミスなどが発生し、ようやく納品されたのは2025年1月後半のことだった。真新しい写真集を仏壇に捧げ、手を合わせた

の言うまでもない。

写真集は友人、知人に押し売りし、少しずつ残部を減らしているが、福島県・吾妻小屋のボランティア・スタッフだった曳地信さんから4人が納品を待ちきれず、新幹線で取りに来られたのにはびっくりするやら、嬉しいやら……。宅配便で送れば翌日届くの、長年の関係がそうさせたのか、絆であろうか。

出版を決意する前に耳にした話では、八甲田山の植物誌を出版した方が、本があまり売れなかったので書店から返品された本を自宅に敷き、その上で寝ていたということを知り、私は不安を覚えていた。また、前述した写真家・笹森秀雄さんは、八甲田山を代表する写真家だったのに1冊の写真集も出してない。存命だったら、今回の私の本を見て、「なんだ、この程度の写真集か」と笑われるかもしれない。

私はふるさとの山、八甲田山にこだわって撮影を続けてきたなかで、カラー版やモノクロ版で何冊かの写真集を残すことができた。少し落ち着いたら、青森県立図書館と青森市立図書館に『白い山』

八甲田山』を寄贈し、後世の人々に八甲田山の美しい姿を伝えていきたいと思っている（本にISBNコードが付いていると地域に関する本は図書館が購入し、蔵書としてくれる）。

今回の『白い山 八甲田山』は偶然、本棚から白黒プリントが出てきたから本になったとはいえ、長い間、いつかは本という想いが実を結んだのではないかと思う。出版できたことで本人は両手両足を挙げて喜んでいますが、長い間一緒に山を歩き、スキーシーンではモデルにもなってくれた妻・志津子も、今回ばかりは喜んでくれている。

（写真家、青森市在住）



本写真集は自費出版のため、書店では販売していない。購入希望者は下記まで。〒038-0003 青森市石江江渡123-7 いちのへ義孝写真事務所へ現金書留で（写真集代3900円＋送料500円、計4400円）

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(39)『古道巡礼』 (高桑信一著・東京新聞出版局)

近藤雅幸

私が古道に興味を持ち始めたのはいつのことだったろうか。

山の尾根道を歩いていてふと見つける峠の石仏。沢を登っていてときどき眼にする沢と錯綜する古い踏み跡。人のいない山で遭遇する人の残滓。それらはどこか心を惹き付け、見捨てておくことができない。その先に何があるのだろうか？ここをどんな人がどのように歩いたのだろうか？ そんな想像力を掻き立て、ついついそれをたどってみたくなってしまう。

それから時を経て、いつしか私は古道を好んで探索するようになっていった。今は舗装道路になっ



古道巡礼

平成17 (2005) 年初版発行

まった幹線道路のわき、溝状にどこまでも続く草生した道型をたどると、ぽつんと独りたずむ小さな馬頭観音。その前にたたずみ、そこを歩いた旅人や牛方の姿を思い浮かべる。道跡の先で見つけた、朽ちて灰色に沈んだ小屋の跡は、なぜか悲しい気持ち掻き立てて仕方がなかった。こんな所には誰も来ないと思っていた峠の小さなお堂に、ささやかなお供え物としてカップ酒が置いてあるのを見ると、ほっとして胸の中が温かくなってくる。まだ誰かがこの場所を、この道を気にかけてくれているのだ。深いブナの樹林を放浪しているときにナタ目を見つけたときには、道の先行きが明るくなったような気がすることもあった。

峠越えや古道の紀行に目が向くのは、時間の問題だった。まずは『北山の峠』(上・中・下巻、金久昌業著)、それから田中欣一氏の詩情

を掻き立てる塩の道に関する本など。もともと書籍と親和性があった私の山歩きは、それらの本や文によってますます古道に傾斜していった。

そんな古い道歩きを続けていたときに出したのが、本書である。それまでの私の古道歩きは、もっぱら関東・中部・関西に限られていた。本書の中には歩いたことのある道もあつたが、北海道や東北の道は歩いたことがなかったので、特に興味を惹かれた。詩情にあふれた語り口のせいかもしれないが、本書に登場する古道は、いずれも魅力的で想像を掻き立てた。

本書の著者のように何度もその道に出かけ、地元の人々からその道にまつわる話を聞き、さらに文献に当たるなどということは、忙しいサラリーマンだった私には到底できないことだったが、それだけにないものねだりで記事は憧れを掻き立て、それらの道が輝いて見えた。

本書の冒頭に出てくる八十里越えも歩いてみた。時間がなかったので全てを歩き通すことはできなかったが、新潟県の下田から途中まではたどることができた。歩いたのが夏だったせいもあるが、道は適度に

草生していて、本書の文から想像していたものと大して違ってないのがうれしかった。しかし、只見から新潟県に抜ける道路工事の一端も目にして、この道の先行きを考えると暗澹とした気持ちになった。古道は今も活きているが、人間による便利さの追求によっていつかはすたれていく。それを改めて思い起された。

いま本会で、創立120周年記念事業として日本国内にある120の山岳古道の調査を行なっていることは、会員の皆さんならご存じだと思う。八十里越えをはじめとして仙北街道、会津中街道、増毛山道、熊野古道の小辺路、鈴鹿の千草越えなど、120の古道に選ばれた道のいくつかも本書に載っている(「津軽白神のみち」は入れるかどうか検討中)。その中ではすでに増毛山道、仙北街道、八十里越えの3つの古道が、ホームページで公開されている。一つの本書の読み方として、それらの古道をHPの記事で確認しながら読み進めるのも面白いかもしれない。

文庫版はヤマケイ文庫(2015年初版発行、税込み1078円)がある。

(図書委員会委員)

④『喜作新道 ある北アルプスの哀史』（山本茂実著・朝日新聞社）

久保田賢次

新道—こう呼ばれる道の多くは登山の黎明期から長く歩かれてきたものだが、なぜか夢を誘う響きを持つている。誰がどんな想いで開削したのだろうか。最近、登山道の成り立ちに思いを巡らすことが多い。普段は何気なく歩かせてもらっている山の道。コロナ禍後、維持管理の課題などが話に上ることも増えたなか、私的にも興味が尽きない。そうしたこともあって、半世紀近く前に出会った本書を読み直してみた。

初めて読んだころ、この道は「喜作新道」という名称よりも、「表銀座コース」という呼び名で私たちが惹き付けていた。北アルプスの燕岳から大天井岳、西岳を経て槍ヶ岳に至る稜線に拓かれた道だ。縦走路の途上にある大岩に埋め込



昭和41（1971）年初版発行

まれた小林喜作のレリフ。行き交う登山者たちを見守るように、捻り鉢巻きで穏やかな笑みをたたえた表情からは、山城を縦横無尽に駆け回って猟をしてきた豊かな経験と、新道開削に懸けた確かな情熱が伝わってくる。しかし、深い黒部の谷での雪崩遭難という、いささか謎に満ちた死を知り、当時の山村の厳しい暮らしや人付き合いの煩わしさを思うと、読後感はやや複雑なものであった。

本書は昭和46（1971）年に朝日新聞社から刊行された。著者の山本茂実は大正6（1917）年に長野県松本市の農家に生まれ、近衛歩兵第三連隊での軍隊経験を経て戦後は農業に従事。31歳で早稲田大学に入学したという経歴を持つ。昭和43（1968）年に同じ版元から出てベストセラーとなった『あゝ、野麦峠 ある製糸工女哀史』も有名だが、同じ『哀史』という副題を添えて刊行されたのが本書である。濃い緑色の地に、輪カンジキが大きくデザインされた表紙も印象的だった。

喜作は明治から大正の時代、当時の南安曇郡西穂高村牧に生まれ、腕利きの猟師として知られていた。ときには山案内人としての仕事も引き受けながら、登山ブームの到来を予感し、より短期間で槍ヶ岳へと登れる新道の開削と山小屋経営を思い立った。人が歩けることなど想像もできなかったような難所をつないで道が開通したのが大正9（1920）年。殺生小屋としてのちのちまで登山者に親しまれる山小屋が盛況となったのが、同年である。

翌年3月、自らは最後の猟との心づもりで入った黒部の棒小屋沢の狩小屋で、長男とともに雪崩に埋没して亡くなってしまった。親子以外の5人は生還したこと、獲物の取り分を巡るなどの争いで殺されたのではないかとという噂も立ったが、当時の記憶を持つ人々への人念な聞き取りや、資料に克明に当たった結果が綴られた本書を読み進むうちに、ガメツイ守銭奴のように評された喜作も、実は争いごとを嫌う、控えめでさっぱりした性格だったという人物像が、読む人の心に内に結ばれていく。

欲の道・喜作新道（第一話）、牧

の喜作（第二話）、工女と女学生（第三話）から、最後の猟犬ペス東鎌に消ゆ（第十三話）まで、13の話題が時間軸で次々と描かれていく。ほぼ同じ時代に「高地の主」と慕われた「常さ」こと内野常次郎と、互いの人生を対比させるように描いた内容も涙を誘う。正月山行に向かう学生山岳部員らと、製糸工場での勤めを終えて帰郷する工女たちとの混雑する夜行列車内の騒動、北鎌尾根を巡る学習院と早稲田の先陣争いとして報じられたできごとの真相ほか、当時の登山世相を描いた数々の逸話も興味深い。

喜作という人物は、本当はどういう人だったのだろうか。当時の話を聞きながら、喜作さに案内してもらっている贅沢な情景を夢想しながら、100年以上の歴史を見続け、数えきれない数の登山者を憧れの槍の穂先へと導いてきたこの「新道」を、もう一度たどってみたいと思う。

本書は78年に角川文庫に入り、その後、86年に朝日文庫として刊行された。現在は、昨年6月に出たヤマケイ文庫（税込み1320円）で読める。

（総務担当理事）

活動報告

山行委員会

篠栗四国八十八ヶ所歩き 遍路報告

2月12～16日、3泊4日で、篠栗四国八十八ヶ所を巡ってきた。

日本各地に八十八ヶ所はあるが、「四国八十八ヶ所」と名乗るのは四国と知多、そして篠栗(福岡県糟谷群篠栗町)の3ヶ所だそう。

篠栗は約1200年前に空海が密教を学び、唐から帰国した際に霊山として山岳信仰の聖地である若杉山(奥の院)を訪れ、加持修法によって人々を救済した地とされている。その後、1835年に早良郡愛宕の観音寺尼僧・慈忍が四国八十八ヶ所を巡拝した帰路に篠栗を通り、疫病と飢餓に苦しむ人々に出会い、病魔退散、村民息災の祈祷と滝行を行なって、村に安寧をもたらしたという。慈忍は四国八十八ヶ所を模した霊場の造

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。



篠栗・大宝寺での記念撮影

立を提起し、呼応した村民たちにより石仏が造られ始めたのを起源とする。

篠栗観光協会により全長50km、3泊4日の歩き遍路モデルコースが紹介されている。6時間から8時間の行程で、高低差は最大600m。舗装されていない遍路道も数多くあり、道しるべが分かりやすく、快適な歩きが楽しめる。



南蔵院の世界最大の釈迦涅槃像

5名の参加者で、1日目は地元の北九州支部・篠栗山の会の方々4名との同行となった。篠栗駅近くの33番本明寺で事前に依頼した納経帳を受け取りスタートした。納札も四国八十八ヶ所と同じものを使用、多くの札所がスタンプでの納経だった。20番鶴林寺、42番仏木寺、65番三角寺、10番切幡寺、39番延命寺など四国と同じ寺名、さらに十夜ヶ橋もあり、四国を思い出す。

総本寺は1番南蔵院で、高野山真言宗の別格本山でもある。釈迦涅槃像はブロンズでは世界最大だ。

全長41m、高さ11m、重さ約300t。内部に入ることもでき、(土)

(田)は内外の観光客が行列をつくる。地元の方の話では、宝くじ3億円が当たったので像を造り、今も宝くじを買い続けているそうだ。

若杉山は、霊峰若杉と言われてきた霊山だ。ミゾレが舞うなか、悪人は通れないという奥の院の関所「はさみ岩」を全員で通り、ご本尊弘法大師様像を拝謁した。

最盛期は70軒あったという宿は、

支部

だより

埼玉支部

橋本会長を囲む座談会

「橋本会長とトークしよう」

去る2月15日、橋本会長をお招きし、埼玉支部安全登山委員会主催の座談会「橋本会長とトークしよう」が開催された。埼玉支部員のほか、東京多摩支部、千葉支部からの参加者も交え、女性が3分の

今は13軒とのこと。それだけに残った宿はそれぞれ心温かく、料理もおいしかった。ポットを宿に忘れたら車ですぐに届けてくださった。私たちが今どの辺りを歩いているのか分かってるのだ。お接待は住職のいるお寺で数多く受けた。2月に巡るお遍路さんは少なく、桜のころと秋が多いようだ。次回は季節を変えて巡りたい。

(数見直)

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

2を占める賑やかな会となった。

座談会は橋本会長より、1「会長の登山経験について」、2「登山について医師の視点から」、3「日本山岳会のこれから」のテーマについてお話をいただき、それぞれのテーマで質疑応答を挟んでいくという形式で進行了た。

1の登山経験についてのお話では、女性登山隊で登頂した数々の

山でのエピソードやその体験から得たものについてや、米国乳がん財団とのタイアップで長年続けておられる「がん患者との登山について」のお話をいただいた。セブチユカン初登頂、隊長としての数々の登攀などの華やかな経歴を、さらっと笑いも交えながらお話をされる姿が印象的だった。

2の医師の視点から見た登山についてでは、高山病と言われる症状、片頭痛・低酸素血症などの具体的な解決策を説明していただいた。加齢による平衡感覚の衰えを筋トレで補うというお話の中で、「初めてこの論文を読んだ50代のときに、70過ぎて筋トレなんかしないよね、と思ったのですが……しますね」と話されたときには思わず笑ってしまったが、つまり筋トレをされているということだった(私も反省しました)。そのほか、多くの会員の悩み、足のつりや筋トレの仕方について会員との活発なやり取りがあった。

3のこれからの山岳会についてのお話では、日本山岳会創立120周年に当たって作成されたスローガン「みんなの日本山岳会」は、山岳会の発起人の方々の書き残し



橋本会長(前列中央)を囲んで記念撮影

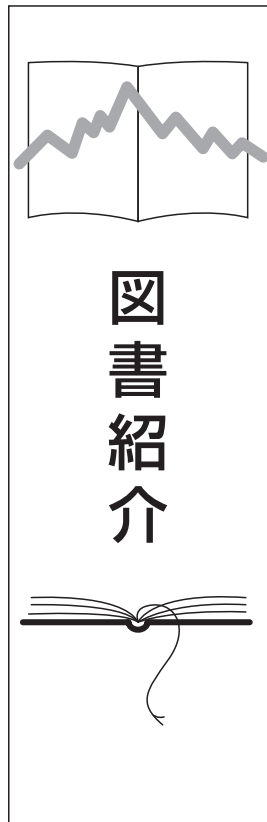
たものや、歴史に関する記録と現在の日本山岳会の状況を徹底的に擦り合わせた結果であることを説明していただいた。「ヒマラヤから高尾山まで」とおっしゃったのが印象深い。

あつという間に2時間が経過し、お開きとなった。遅い時間にもかかわらず、会長にはその後の懇親会にもご出席いただき、参加者は大満足の一夜となった。

この時間を通して、会長の山で培ったリーダーシップとバランス感覚に改めて敬服した。「みんな

の日本山岳会」を会長と一緒に盛り上げていきたいと思った。

(埼玉支部安全登山委員会・磯崎 佳奈)



図書紹介

登山と身体科学

山本正嘉著



2024年5月
講談社刊 327頁
新書判 1100円＋税

「運動生理学」という学問をご存

じだろうか？ 耳慣れないという方も多いかもしれないが、簡単に言うと、やろうとしている運動がどのような特徴を持つ運動なのか、そして自分の体がどのような仕組みで動くのか、を考察する学問だ。本書は、「登山」という運動を「運動生理学」の視点から考察したもので、著者の山本正嘉氏の研究成果の集大成である。

内容は、まず第1章で、登山と

はどのような運動であるのか、について解説している。登山をすることによる心身の変化、登山とウォーキングやジョギングとの比較、体脂肪の減量効果など、登山という運動を行なうことによって、我々の体の中で何が起こるのか、について説明している。続いて第2章では、実際に山に登る際に、だれもが気になる山での疲れにくい歩き方についての興味深い解説がなされている。登山時の疲労の種類、きつさ(主観強度)で自分のペースを掴むこと、パーティ登山での安全安心なペースを作るにはどうしたら良いのか、についてなど、実際に歩く上で役に立つ情報でいっぱいだ。第3章では、山での栄養補給の方法について触れており、登山者にとって必要な栄養素が水

分、炭水化物、塩分であること、不足したときに起こるトラブル、水分とエネルギー補給の具体例について紹介している。一般的な三大栄養素(タンパク質、脂質、炭水化物)と登山におけるそれが異なる点が興味深い。

第4章に入ると、「環境の影響から身体を守る」というテーマで、登山の現場での対応に役立つ内容となっていく。具体的には、行動適応という考え方についての解説、熱中症、低体温症、低酸素による疲労などについて触れられている。いずれも、そうならないに越したことはないが、山を歩いていれば必ず起こる可能性のあるリスクであるから、正しく理解するために

「会員優待サービス」変更のお知らせ

本会報1月号に同封した一覧表の中から、左記のような変更がありましたのでお知らせします。

＊【八ヶ岳・霧ヶ峰】硫黄岳山荘・根石岳山荘・夏沢鉱泉／3軒とも先方の都合により本年3月末でサービスを終了しました。

電子版会報「山」への登録のお願い

2月号に同封させていただいたハガキの返信、ありがとうございました。1000人ほどの方が電子配信を希望され、3月31日現在で688名の方が登録されています。これだけでも年間100万円ほどの経費削減になります。

なお、会報4月号はテスト段階として、電子配信希望の方にはデジタル版と従来のペーパーの両方を送らせていただいております。5月号からは、登録者の方にはデジタルのみの配信になります。

電子版を希望したが、電子版の通知(メール)が来なかった方は、迷惑メールなどを確認の上、再度下記のURLもしくはQRコードで登録をお願いいたします。不明な点は、デジタルメディア委員会(internet@jac.or.jp)にお問合せください。また、新たに電子データでの配布に協力いただける方の登録、および登録したアドレスの変更などは、下記のURLからお願いします。



電子版への登録

<https://jac1.or.jp/kaiin/2025040135272.html>

も有用な内容である。第5章では、「山で起きる身体トラブルを防ぐ」というテーマで、引き続き現場での対応に役立つ内容が続く。具体的には、山で起こる身体トラブルと事故とのつながりとその防止、自らの体の状況を可視化して考えることの大切さなどに触れており、ハイレイトは自分の体の「品質管理」を「QCシート」を用いて行うことの勧めである。

後半の第6章、第7章では、山から離れて、下界ですべき身体面でのトレーニングと計画の立て方について採り上げている。第6章は「体力トレーニングの考え方と方法」というテーマで、トレーニングをしているのに役立っていない人が多いことを指摘した上で、その理由と対策について具体的に解説している。特に登山の量は1ヶ月で高低差＋－2000m、頻度

は1週間に1回程度が理想的であること、それを実施するのが難しい場合の、下界でできるトレーニングの有効活用方法について解説されている。

第7章は「登山計画の立案と身体面の準備」というテーマで、まずは机上でできる「机上トレーニング」を行ない、続いてトレーニングの実際について、具体的には負荷の上げ方、負荷量の上限と休養の大切さ、体力チェック登山、下界での補助トレーニングの組み合わせ方、年齢別、性別で見た留意点について解説している。

最終章の第8章では、「安全登山の仕組みづくりとセルフチェック」というテーマで、無理のない登山とはどういうことか、山のグレイディング表の仕組みとそれを用いたセルフチェック、コース定数とそれを活用したイメージ・トレーニングとシミレーション・トレーニングについての説明とともに、新しい動きとして、全国共通の「標準コースタイム」の提案や登山地図アプリを応用した身体管理、IT情報を利用する際の留意点について触れている。

「運動生理学」という新たな視点

で自らの歩き方を振り返ってみる、良い契機になる一冊である。

(床田真理)

大島康弘著

中央分水嶺 やぶ漕ぎ物語
竜飛岬から谷川連峰へ1000km



2024年12月
山と溪谷社 A6版 584頁
2800円＋税

2002年8月1日、著者(当時56歳、元静岡支部長)は、本州最北端の青森県竜飛岬に立ち、本州の中央分水嶺の踏査を目指して、期待と不安を抱きながらスタートした。だが、踏査2日目にしてチシマザサの激しいヤブに苦戦し、6時間かけてわずか2kmしか進めず、態勢を立て直すためあえなく敗退することになり、不安が的中してしまう。しかし、地元の森林管理官の励ましとアドバイスで、3日ばかりでこの難局を乗り越えることができ、勇気づけられる。

その後もルート・ファインディングの難しさを何度も経験したう

えに、クマとの遭遇に最大限の注意を払いつつ、ダニの猛威にも耐えて踏査を続けていく。また、天気予報には絶えず注意しており、無理せず停滞する判断も適切に行なっているが、雨中の行動を余儀なくされたり、そのうえ山行中はほとんどがビバークのためときには大変な思いも経験している。しかも途中の2006年1月にアコンカグア登頂後にビバークする羽目になり、凍傷で左指4本を失ったため、作業に時間を要するなどハンディキャップを負いながらも不屈の精神で踏査を継続している。

本書は、このチャレンジの様子を2019年10月に踏査した新潟・群馬・長野県境の三国峠までの記録を克明にまとめている。ほぼ年2回のペースで静岡県島田市の自宅から現地へ赴き、1回当たりほぼ6日間入山している。このため、その間の食料と水などで荷物は二十数kgとなり、これを背負って激ヤブと戦い抜く様子が臨場感あふれる文章と写真で描かれている。

著者によると、本州の中央分水嶺踏査を個人で完結した猛者は3

創立120周年記念式典への 海外友好団体招請募集について

日本山岳会は、本年創立120周年を迎えます。12月6日にヨッヘン・ヘムレブ氏(1924年の第3次英国エベレスト隊で消息不明となったマロリーとアービンの遺品捜査や調査・研究の第一人者)の特別講演と海外友好登山団体を迎え、下記のように記念祝賀晩餐会を企画しています。

これまで本会所属の各組織では、多くの海外登山団体と親善・交流を続けてきた実績がありますが、今回各支部や委員会、同好会、プロジェクトの皆さまのご協力を得て、海外岳友の方々を招請して創立120周年をともに祝いし、今後も親善・交流を継続していく機会にしたいと考えております。

日本初の海外登山隊である1925年のカナダ・アルバータ峰初登頂に始まり、1950年代のマナスル登山以降1960(2000年代まで、本会は数多の海外登山隊を送り出してきました。20年前の創立100周

年記念催事にも多くの海外登山団体に参加していただき、親睦を深めることができました。今回の創立120周年記念催事を契機に、本会と海外登山団体との相互友好関係がさらに強化され、今後も登山活動を通じて国際交流を深め、継続していくための布石にしたいと思います。

【記】

1・招請団体

日本山岳会の支部や委員会、同好会および創立120周年記念事業プロジェクトなど、本会の所属組織において交流実績のある海外登山団体とします。

2・行事日程

12月5日(金)来日出迎え、ホテル集合(京王プラザホテル宿泊予定)

6日(土)午後後に記念講演会・年次晩餐会参加(京王プラザホテル宿泊予定)

7日(日)解散(自由行動)

3・招請条件

①参加招請団体は、往復交通

費については自己負担を原則とします。日本山岳会の負担としては、国内滞在費(宿泊費2泊分と歓迎会・晩餐会費用)の半額程度を考慮していますが、この経費は、募金活動により集める予定です。また、来日後の接遇全般(出迎え、会場案内、アテンドなど)については、当該担当組織において行なっていただきます。

②招請を希望する場合、別紙の「招請希望申込み書」を送付しますので、左記へご連絡ください。招請決定後、後日配布の案内状定型文を使用し、担当組織から海外登山団体側に招請の案内をししてください。

③招請団体は約10団体20名程度とし、参加者数が多い場合は調整させていただきます。

④招請希望申込み書提出期限
11月5月末

*お申込み先 日本山岳会創立120周年記念式典委員会・国際交流プロジェクト 桐生恒治(kiryu.nandadevi@gmail.com)または飯田肇(tida@atatecal.or.jp)

名いるそうだが、いずれも季節や地理的条件などを考慮してその都度踏査区間を設定し、最終的に全てを線で結んでいる。また、JACでも創立100周年記念事業の一つとして北海道と九州を含めた中央分水嶺踏査（筆者がプロジェクトの事務局長を担当）を実施したが、支部と同好会を中心とした多くの会員で実施した成果である。これに対して、著者は北から南へ忠実に踏査線を延ばすことを基本としており、必然的に無雪期でのヤブ漕ぎをもいとわない姿勢を貫いている。まさにJACの掲げる

一つの柱であるバイオニア・スピリットの実践そのものと言える。この踏査の背景には地元の人との交流があり、そのアドバイスと励ましが根底にあることが本文中の随所に記載されている。これは、東北人の優しさとねばり強さが著者と共通しているようで興味深い。本書の編集段階でも踏査を継続し、2023年までに長野・群馬県境の田口峠まで進めていることも記述されている。今後とも年齢による体力の衰えと相談しながら、どこまで踏査を延ばせるか楽しみである。（森 武昭）



令和6年度第11回(3月度)理事会 議事録

日時 令和7年3月13日(木) 19時
30分～21時15分

場所 集会所およびオンライン
(Zoom)

【出席者】橋本会長、永田・桐生各

副会長、長島・南久松・平川各常務理事、松田・川瀬・望月・原田・猿渡・久保田各理事、石川・清登各監事
【欠席者】飯田副会長、池田理事
【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

- 1・令和7年度事業計画について（長島）（賛成12、反対0）
- 2・令和7年度予算について（南久松）（賛成12、反対0）
- 3・特定資産の取り崩しについて（南久松）（賛成12、反対0）
- 4・令和7年度資金調達および設備投資計画について（南久松）（賛成12、反対0）
- 5・YOUTH CLUBの組織変更について（松田）（賛成12、反対0）
- 6・令和7年度支部特別事業補助金の承認について（松田）（賛成12、反対0）
- 7・外部理事・監事を含め来期の役員について（長島）（賛成12、反対0）
- 8・本部事務局長の配置について（永田）（賛成12、反対0）
- 9・「山岳自然山岳文化基金」の設立について（永田）（賛成12、反対0）
- 10・海外登山志向の若者への対応について（永田）（賛成12、反対0）

【協議事項】

- 1・支部連絡会（3月26日実施）について協議した（長島）

【報告事項】

- 2・小島烏水祭(四国支部主催、本部主管)への対応について協議した（長島）
- 3・創立120周年記念事業募金委員の依頼について協議した（長島）
- 4・広島支部からの特別事業補助金繰越依頼について協議した（松田・南久松）
- 5・総会までのスケジュール確認について協議した（長島）

【報告事項】

- 1・入会者承認報告について（橋本）
- 2・2024年度末・会費滞納者除籍予定者について（長島）
- 3・寄附金および助成金受入報告について（南久松）
- 4・同好会・山行クラブの設立承認について（長島）
- 5・本部入居マンションの旧管理人室の賃貸先について（長島）
- 6・日本山岳会役員名を語る詐欺について（長島）

【その他】

- 1・会報「山」3月号の進行状況について（節田）

ル ーム 目 誌 3月

3日	記念事業委員会(山岳古道調査) 学生部
4日	広報委員会 スケッチクラブ
5日	山行委員会
6日	常務理事会 YOUTH CLUB委員会 山岳地理クラブ 紫蘭会
7日	入会説明会
10日	支部ヒアリング アルパインスキークラブ
11日	YOUTH CLUB委員会 フォトクラブ
12日	財務委員会 かつぱの会
13日	休山会 山想クラブ
14日	記念事業委員会(国際交流) 図書委員会
15日	アルピニズムクラブ
17日	総務委員会
18日	麗山会 アルピニズムクラブ アルパインスキークラブ(幹事会) バックカントリークラブ
19日	東京支部設立プロジェクト つくも会 三水会 山遊会
21日	自然保護委員会 クニ塾
24日	記念事業委員会(引き継が

25日	平日クラブ	れる山岳祭) YOUTH CLUB委員会 みちのり山の会
26日	支部連絡会 子どもと登山委員会	
27日	記念事業委員会(グレート・ヒマラヤ・トラバース) 公益法人運営委員会 科学委員会	
28日	記念事業委員会	
29日	緑爽会	3月来室者 297名
会員異動		
物故		
熊谷とも子(4371)	25・3・20	
三木 亮(4486)	25・2・28	
田邊 壽(4618)	25・3・14	
百瀬寿雄(4659)	25・3・21	
岩佐吉雄(4913)	24・12・31	
齋藤惇生(5373)	25・3・11	
米川正利(5703)	25・2・25	
今村千秋(6775)	25・3・2	
森沢堅次(6894)	25・3・3	
木村孝保(7347)	24・9・28	
本多彦一(8583)	25・2・23	
内藤守彦(9108)	24・12・23	
近藤 宏(11480)	25・3・18	
足立 功(11886)	25・2・19	

橋本 衛(12469)	25・1・12	
高橋丈夫(13602)	24・9・28	
藤原幸一(15496)	25・1・31	
退会		
本間宏之(5557)	越後	
曲輪 勲(6901)		
大日常男(7217)		
溝部直樹(8249)		
星子貞夫(8582)	東九州	
日本太学理工学部山稜会(8825)		
木下 一(9104)	関西	
金井敏夫(9566)	群馬	
田村哲朗(9688)	宮崎	
高橋 毅(9816)	青森	
堀嘉余子(9836)		
福田智恵子(10201)		
田村充子(10480)	宮崎	
平木清一郎(11263)	京都・滋賀	
今井敏明(11456)	越後	
久徳秀郎(11485)		
松澤保雄(11775)	信濃	
佐藤昭次郎(11830)	宮城	
小玉則子(12027)		
岩崎元郎(12088)		
菊地たかね(12089)		
目崎貞良(12104)	越後	
小林順子(12212)	福井	
奥 克彦(12314)	京都・滋賀	
今野道子(12395)	山形	
百瀬信敬(12587)	信濃	

乾正太郎(12817)	宮崎	
鈴木茂生(12940)	東海	
石垣陽一郎(12944)		
治田利治(12969)	越後	
諏訪 肇(12990)	茨城	
三渡忠臣(13300)		
佐藤 守(13431)	東京多摩	
水野恵子(13453)	静岡	
鈴木伸介(13816)	山梨	
清野 博(13945)	静岡	
松田 章(13972)		
黒瀧 明(14236)		
後藤 昭(14339)	広島	
西岡義則(14350)	広島	
朝尾博謙(14409)	広島	
佐々木悦子(14443)	秋田	
東 和之(14483)	栃木	
朝尾洋子(14747)	広島	
近藤知子(15009)		
三村 隆(15056)	広島	
伊藤純一(15065)	東海	
川瀬眞知子(15110)	東海	
森本真由美(15120)	東海	
松見昌代(15128)	東海	
川野民子(15266)	東海	
園田さえ子(15287)	東海	
若槻 直(15307)	広島	
竹田寿美子(15520)		
堂前加代(15542)	広島	
飯島実千代(15545)	東海	

矢内正男(15604)群馬
江下実希(15612)
石橋 學(15643)東京多摩
高波菊男(15903)越後
滝 清子(16008)東海
櫻井恵美子(16024)東海
井上紀江(16170)広島
志波喜久子(16185)神奈川
新宮原正美(16218)広島
宇佐美文圭未(16357)群馬
小林真澄(16386)埼玉
北村泰三(16400)
松本重裕(16464)北九州
富田容子(16539)埼玉
菅原純悦(16735)岩手
森 佳子(16814)岐阜
大村春樹(16890)
佐藤翔一郎(16928)
當重君枝(16986)越後
青木貴祥(16991)東海
鍛次真由美(17017)東海
中村香菜(17030)東京多摩
小林美喜(17240)東京多摩
丹羽大輔(17243)広島
柏木孝子(17370)
青島吉野(17383)静岡
深町友和(17430)広島
只野奈津子(17508)
北村陽子(17523)埼玉
近藤美奈子(17528)山梨

高須房子(17558)青森
日向良平(17595)埼玉
清水真理(17608)山梨
正会員に移行離籍
鈴木由香(17671)北海道
浜中義勝(17677)福井
中尾新士(17678)広島
本村貴子(17680)埼玉
金井貴裕(17681)広島
清水信三(17682)群馬
小川茉莉(17684)北海道
稲富正彦(17685)東京多摩
木暮和子(17691)群馬
渡部 亮(17693)
山内信太(17694)
森田栄二(17695)
山下貴徳(17696)
山下和保(17698)東京多摩
脇葉 裕(17699)静岡
洪沢泰夫(17703)
井田智子(17704)山梨
小川基子(17705)山梨
三田貴子(17707)
中村由佳理(17708)群馬
鈴木みち子(17709)
塚越和子(17713)埼玉
佐藤 明(17718)山形
佐々木潤也(17720)北海道
佐藤善武(17722)宮城
大野国光(17723)埼玉

藤島妙子(17724)

照井敏弘(17725)岩手

吉田湖恵(17729)埼玉

山下 肇(17731)東京多摩

八木元子(17732)東京多摩

石澤貴子(17749)山梨

福森亮二(17785)

石川弘子(17759)宮城

渡邊典男(17762)宮城

安藤 匡(17779)北九州

田中利昌(17766)埼玉

在籍期限終了離籍

WANGTING(17787)

長沼滋雄(17789)静岡

岩崎眞琴(17790)東九州

三田 覚(17796)

訂正

*会報2月号に同封しました「引き継ぐ山岳祭」のパンフレットで間違いがありましたので、訂正させていただきます。

*2ページ目の山岳祭一覧図のナンバーで⑪木暮祭、⑫横有恒碑前祭とあるのは、⑪横有恒碑前祭、⑫木暮祭の誤りでした。

(会報編集委員会)



◆編集後記◆

●友人に「首都圏近郊でどこか良い花の名低山はないか」と問われたので、栃木県の三叟山を紹介しました。万葉集の東歌に「下つ毛野三叟の山のか檜のすまぐはし子ろは誰が筈か持たむ」と詠われたこの山には、かつて安蘇山地の根本山・熊鷹山に登ったとき訪れており、カタクリやアズマイチゲの群落が見事で、感激したものでした。

●ただ、この山を歩くだけでは勿体ないので、近くの柏倉温泉に泊まり、翌日は足利の街の観光をアドバイス。史跡足利学校や鏝阿寺(日本百名城の一つ足利氏館)などを見学したのち、お昼は一茶庵本店でお蕎麦というプランを勧めておきました。自分のためではなくとも、山旅のプランニングは楽しいものですね。

(節田重節)

日本山岳会会報 山 959号

2025年(令和7年)3月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
編集人 節田重節
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社